

《第 536 回(2026 年 7 月 9 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ポジション!』 高田 由紀子/作 岩崎書店

7月、『ポジション!』を読みました。小学生の芽吹と晴と結人は、ミニバスケットチームに参加するチームメイトです。車いすバスケットをするルイと関わりながら、自分の居場所を模索して成長する子どもたちをそれぞれの視点から描いた物語です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●ミニバスケットとは、小学生向けの規模の小さいバスケットボールのことを言う。子どもが困難を乗り越えて成長していく物語を読むと、「自分が子どもの時と比べると、小学生なのにしっかりしてる」と感じる。晴が自分の嫉妬心を認めて、芽吹と仲直りした場面が良かった。

●群像劇で子どもが読みやすいスポーツ青春もの。以前の課題図書の『とびたて!みんなのドラゴン』(オザワ部長/著 岩崎書店)を思い出した。鉄じいの「勝つことは大事だが、もっと大事なものがある」という台詞が、自分の教員時代と重なった。p.83 でルイは「痛みを抱えたままでも前に進んでやろうじゃん、って思ってる。障がいがあるっていうこのポジションを楽しんでやろうって。」と語る。人には人それぞれに居場所があると感じた。

●登場人物が身近に感じられて、自分を映しこみながら読めた。運動音痴の気持ちが分かるので、芽吹に共感することができた。ミニバスケットをする3人にとって、車いすバスケットをするルイくんは鏡のように対となる存在だと思う。子どもの周りにいる大人の描き方が良く、特に鉄じいは子どもに掛けるべき言葉を知っていると感じた。

●バスケットコートの中のポジションと自分の居場所という 2 つのテーマが重なって描かれている。ミニバスケットのチームメイト・友人・親子の関係など、人と人をつなげていくストーリーになっている。

●楽しく読めた。登場人物の個性が分かりやすい。子どもが生活していくためには親の助力が必要になるため、どうしても親に合わせるしかない場面もある。ミニバスケット

連以外の子どもが出てきてくれると、もっと話に広がりが出たように思った。試合後に友達と喧嘩して歩いて帰ることになった場面では、身体的にも心理的にも堪えるだろうと感じた。

●車いすバスケットの話かと思っていたが、ミニバスケットの話がメインだった。サクサク読めた。物語に共感し、感情が揺さぶられた。車いすバスケットをしているルイくんの存在が他の登場人物にどんな影響を与えたのか、彼視点の章で描いてくれたらもっと良かった。ラストのシーンが結構好きで、どっちが勝ったのか分からないところが良かった。

●ポジションに込められた思いについて考えた。現代の小説は「話している」が「話している」と表記されるなど、口語で書かれた文章があるため個人的には好きではない。しかし、現代の言葉・文法を使った文章は、今の子どもにとっては伝わりやすい内容になるだろうと感じた。

●子どもが感情移入しやすいお話で、ミニバスケットに興味が無くても楽しく読める。ルイの言う「5年後10年後のぼくたちが見ている」は素敵な台詞だった。子どもの時には分からなくてもその時の経験に無駄なことはなく、頑張った分ちゃんと身になっている事がこれからの時代を生きる子どもたちの心に届いてくれるといいなあと思うが、まずは本を手にしてほしいといけな。

●今の私にぴったりの本だと思いながら、面白く読んだ。人は一人では生きていけない。自分の居場所を探すというのは、人生の旅そのものだと感じた。物語に余白を残してくれている所が良いと思う。

次回 9月10日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ホビットの冒険』

J.R.R.トールキン/作, 瀬田 貞二/訳, 寺島 竜一/絵 岩波書店